

もしかしたらこの作品は、愛と性というものが何なのかと問題提起されたときに不思議と困惑する常識的な「普通の人」に向けて、少なくとも一つの「回答」を示せるかもしれない。そう思いながらも、『愛の叢』の十二番目の掲載作とすることを躊躇していたのは、自分自身でも「これは小説なのか」と疑問視していたからだった。二〇〇七年『岩漿十五号』に載せるべく書き出した時の気持ちは、一つの実験ということだった、むしろ自分自身の本来の書き方から離れていると知ったうえでのこと。「小説ではない」という指摘や内容への批難は覚悟の前だったはず。ということ、コソツとシリーズの「末尾」を穢すことにした。というより「叢のトリ」として代表題にするのは『ヘクソカズラの遺産』にしておきたいので。実は本作には面白いエピソードがある。『十五号』で拙作を読んだ遠方の夫婦が何と車で私の住いまで訪ねてきたのだ。ちょうど私は出張中で老妻が対応した。あとで当方から電話連絡をとったが、どうやら私の精神状態を心配してくれたらしい。「普通の人だったんですね」と直言をくれたご主人はさらに「奥さんも普通の人でした」と勘違いを自主的に謝罪。電話口で二人して笑った。彼はこの直後に同人として入会している。

自分を護ろうとして暴漢に挑み、殺されてしまった恋人。命の対価として守られた「自分の中の女」とは何ほどのものなのか。彼女はその問いに追い詰められて理性的に狂い、それを確認し始める。しだいにエスカレートしていく「女」は、幻覚と妄想の中に逃げ込んでいく。

今回この自作を読み返してみても、先のご夫妻の心配も無理はないかもと頭を搔いた。「あくまでも創り事なだけ」と想いつつ。

当て字や特殊読みが多いのでルビを多用した。行間の幅にムラが出来てしまった。ご容赦を。

戯れる木霊 こだま

馬場 駿

色鮮やかな木々が人に見られることを拒み、モノクロームの世界で寝むことがある。そのとき、風は止み、陽は隠れ、野鳥は黙す。地表近くに屯して、揺れ動いているはずの微細な水滴でさえ、印画紙に定着した粒子のように、ただじっとしてそこにいる。

私が口を開き何か言の葉を発すれば、きつと視界の中の全てがバランスを崩し、あの、慎みのない晴天の風景に化けてしまう。そんな気がして息を詰め、杉の幹にしがみついた。樹の皮に全てを託していた蒼い苔が、私の指に触れてずりりと滑り落ちる。そのとたん、ばらばらっと、大粒の水滴が頭上に襲いかかった。

弾け、離れて私は、そそり立つ益荒男を恐る恐る見上げた。

そこから見えるのは、私の血走った両の眼、艶を失い、いまは皺でしかない乳房の谷間、それとも一人では歩けないほどに短くなった脚…。

墨が水面に広がる。杉の葉が涙で滲んで見えるのだ。嬉しい。あなたの怒りに触れた証だ。また知らない雄を拾った。自分が心の奥底で求めているものを知るために。

今度の男は執拗だった。瞼を舐め、唇を啄み、脳に向かうあらゆる管に舌を這わせた。その間も、羽毛に触れるほどの繊細さで、五指が私の渴いた肌の上を動き回る。悔しさで、戸惑いで、唇を噛んだ。命ごと燃え尽くしたいとさえ思った恋人に感じたもの、あれはただの欲情でしかなかったのか。どの雄犬と目合っても五臓六腑は昂まり、極まれば、理性は一欠けらもなく消し飛んだ。そうであれば彼は、何のために、私を護って死んだのか。こんな私の何にそんな価値があるのか。思わず蹲った私の目の前に、濃紫の花があった。不思議だと思った。彼と出遭ったときの、花の数と同じなのだ。

「それ、擬宝珠って名前です。もっとも花自身は名前なんか知らないで、ただ咲いているだけなんですけど」

微笑むと鬚ができる男だった。

尖^{とが}った葉の先から、丸い水の塊^{かたまり}が滑り落ちた。きれいに並んだ花が一斉にお辞儀をする。水滴が、ゆつくりと大地にぶつかる音が聞こえた。

彼の、透き通るような優しさは、私を溶かした。抱かれたのではない。熱く燃えた彼を招じ入れて私は別の物質になったのだ。・・・そう思っていた。

本当の私は、彼と一緒に逝ってしまったのか。遺されたのは「からだ」：いま、内なる鏡の向こうに見える私は、淫婦でしかない。

「ねえ、しているところ、撮ってくれる」

何人目だったか、拾った男に言った。反証が欲しかったのだ。

男は口笛を吹き、下劣な笑みを浮かべながら、ベッドサイドにビデオカメラをセットした。

途中までは冷めていた。自分の本性を見極めたい一心で。卑しい獣が、横たわる生肉を注意深

く嗅ぎまわる姿を、蔑笑する余裕があった。睡眠、催淫^{さいいん}、避妊：さまざまなピルが創りあげた、血

管すら透けて見える白い肌を、薄っすらと浮かべた涙^{あは}で淨い清めることもできた。

突然、綺麗^{きれい}なものへの憎しみが湧いた。気がつくくと、私の掌^ての中に、千切りとられた擬宝珠の紫があった。

午前九時は回っているはずなのに、黄昏^{たそがれ}時のように薄暗い。観光地なのに、誰一人として歩いて

いないのも奇妙だ。そう思った一刹那、頭の中で何かがピツと裂ける音がした。蹲うずくまって、震えだした私。目の前の杉の太い幹が、左右に揺れだしたのだ。結局この日も、自分の生活の中には戻らなかつた。

「先生、少しは健康に気をつけてもらわないと」

編集者が、私の生原稿を机上こに置いてから、煙草を手にした。

顎鬚あごひげを焦がす距離でライターを点つけ、炎に内緒話でもするようになり、唇を寄せる。「二人」を繋げるのは、細長い白だ。

「優しいのね」と返せば、

「ビジネスですよ。先生のエッセイは金になる。倒れられて一週でも抜けたら騒さわぎだ」と、煙をこぼしながら大きな口が言った。

ただ露悪的で猥褻わいせつだから受けている。文才の故ではない。

「先生は自分の売りを知っているから」

私の心の声を聞き取ったらしい。

「そのタバコ、くださる」

「え、俺の唾つばが付いたの、吸うんですか」

「まさか、消すのよ」

編集者が口を開け、タバコがゆっくりと落ちた。床で弾んで、それは小さな花火になった。

濃藍こあいの空に皓皓こうこうたる月が浮かんでいる。

真ん丸な輝きから、外輪山の頂いたadakiに何かが降り注がれている。宇宙空間でのやりとりだ。それがただの淡い雲だと分かるまでの十数秒の間、私は至福の時を味わった。

「こんな早くにお散歩に。まだ四時ですよ」

ナイトフロントが、浴衣だけでは寒いからと、半纏はんてんを探してきてくれた。

「払眺かっせつってきれいなものよ。太陽関たいようせきの露払いなの」

「はーあ……」と、頼んだドアよりも先に大きく口を開けた彼。音の無い世界なのに、心の声だけは聞こえる。

暗いのに、いや、暗いから、自分の姿がよく見える。だから、この「時」の静寂しじまを選んだ。

佇たたくんでいると、爪先つまさきから踵かかとまでの全てが腐蝕していくのを感じた。歩き出したらきつと、足の裏

が肉ごとずるりと剥けてしまふに違いない。遺すべき足跡もない私だ。ちようど良い。

一時間なのか、数秒なのか、身動きもしない「時」を過ごした後で、意を決した。湖の匂いを嗅いだのだ。

刈り取られた雑草の鋭利な刃先が、下駄に踏まれてクシクシと鳴いた。下る、下る…。辿り着くと、湖面が一瞬、風を呼んで騒いだ。

砂浜も桟橋も無い。彼岸と此岸の境は、草草を生かす土塊だった。

灌木に掴まりながら湖水に足を浸すと、意外にも温かかった。

外輪山が空の黒から漸く分離され、朝霧を従わせて私の前に出てきた。

『まるで浮世絵』

眼を開いたまま、私は、その山々を猩猩緋に染めてみた。かつて火を噴いていた猛々しい姿を想ったのだ。なぜか涙が溢れた。やがて雌黄が混ざり「溶岩」となって、それは瞬く間に足下に及んだ。

『熱い。あなた、熱い』

立ち上がると、急に半纏が燃え上がり、巻き上がる風に剥ぎ取られた。
そそけ立つ髪が、笑いながら何度も頬を打つ。

私は浴衣を脱ぎ捨て、幼児のように手を広げて、裸身を燃える山々に曝した。

「犯して。はやく犯ればいいんだわ」

湖面が白い脛の動きに合わせて揺れる。

細波が股間に達したとき、私は狂喜して叫び声をあげた。

気の弱い雄は、こそこそと、部屋の隅で制服のズボンを穿いた。

「ホテルの人間には内証にしてくださいませか」

彼には自分の質問の愚かしさが判らないらしい。可哀相なことをしたと思った。

全裸で朝の窓辺に立つと、番の小鳥が寄ってきて私を見上げ、揃って小首を傾げた。

限度を知らない男の五指が、臀部を丸く一撫でして遠ざかる。

軽く見られた自分が悍ましく、全身に鳥肌が立った。

後ろで、ドアの閉まる音がした。

急に潤んできた眼の向うで、小鳥がチツと鳴いて飛び去った。

編集長が躍起になって探しているらしい。金にさえなれば芸好きな蚤さえ追いかける奴だ。

また夜明け前に旅館を飛び出して、彷徨っている。

視界が及ぶ限りの荒涼があった。尾花の穂波が鈍い白を創って、さわさわと大地を揺らしている。

景色の中の巨きな曲線を追うと、早朝の化粧をし始めた外輪山に辿り着く。

そこから覗きこんでいる富士の顔は、蒼ざめて白い。

本来見えるはずがない富士は、きつと亡霊だ。

「あなたなのね」

隠れるように草叢に駆け込んだ私。

はずみで左の手首が切れた。凶器は薄の葉だ。身を縮め、獣の真似をして血を舐める。

草いきれが、頼みもしないのに記憶を呼び覚ました。

「俺にもやらせろよ、滅るもんじゃねえだろ」

言葉と同時に、臭い口が、眼と鼻の先まで迫っていた。

「好きなんだろ、外でやるのが」

恋人が、殴られて変形した顔を突き出し、暴漢おとこに組みついてきた。

男二人の体の大きさは、倍ほども違う。

払われても、蹴られても、何度も何度も、めげずに絡みつく彼。

私は、彼の命懸けの誠に涙した。

苛立った暴漢の本気の一撃で、彼は石の上に倒れ、頭から真っ赤な血を噴きだして、死んだ。

暴漢は性欲を殺そがれ、生じた結果に慄おのいて逃げた。

私の「女」は護られた、確かに。でも、それが何だというのか。その代償が彼の生命いのちなのだ。あんなに殴られたのだから、気を失ったふりをして、私が犯されるのを見ていれば、それで済んだものを…。

舐め取った血が口腔に広がるのを待って私は、死んだふりをしてみた。

目覚めると、野原を横切る県道を車が行き交かっていた。

ふっと、添い寝をしてくれた花に気づく。

『優しいのね』

彼、富士山はもう、雲に囲まれて見えない。

ナンバンギセル。こ異草やくに寄生する。

この花の別名が、きつと彼の書き置き。

—— 思い草。

秋の野草たちが、風も無いのにざわざわと騒いだ。